日本医史学雑誌第二十九巻三号
昭和五十八年一月二十八日受付　昭和五十八年七月三十日発行

# 「麻酔」の語史学的研究

松木明知

## 一　序　言

先きに著者[1][2]は、麻酔科の学問の名称として従来慣例的に用いられている「麻酔学」は誤りであり、「麻酔科学」とすべきことを提唱した。

「科」が臨床医学の一分科を意味することは自明であり、したがって「内科」、「外科」に対する語は単に麻酔の現象を意味する言葉の「麻酔」ではなくして「麻酔科」であり、そうすれば当然のことながら、麻酔科の学問は「麻酔学」ではなくして、「麻酔科学」でなければならないことを医学史的にも論考した。

この「麻酔科」、「麻酔科学」という語の基本になっている「麻酔」という語史に関しては不詳とされ、[3]小川鼎三博士の著書にも詳にしていない。

東洋の麻酔科学の歴史は、後漢から三国時代の中国の医聖華佗の業績に始まるといわれていることから、「麻酔」という語も後漢時代（二五―二二〇ＡＤ）に溯る古い歴史を有すると考えられてきた。

しかし著者の研究によって、事実はこれと懸隔すること甚だしいことが判明した。

## 二　華佗から高嶺徳明へ

大麻[4][5]で全身麻酔を施行したと伝えられる華佗は、魏の曹操の侍医となることを招請されたが、これを拒絶したため獄に投ぜられ、ついに獄死した。獄中で華佗はその著作を焼き捨てたため、その麻酔法の秘伝は世に伝えられなかった。華佗が、彼自身開発した麻酔法をどのように表現したか、今となっては知る由もない。

彼の略歴を伝える「後漢書華佗伝」[5]には次のように記されている。

「若し疾発し内に結し、針薬及ぶ能わざる所の者は、乃ち先ず酒を以て麻沸散を服せしむ、既にして酔いて覚る所無し。」

さらに「魏志華佗伝」[5・6]には、「若し病結積して内に在り、針薬及ぶ能わざる所、当に刳割（こかつ）を須（もち）うべき者は便ち其麻沸散を飲ましむ、須臾（しゅゆ＝しばらく）にして便ち酔死の如く知る所無し」と記されている。

この二つの文献の編者は、華佗が作り出した意識のない状態を「酔死の如く」または「酔いて」と表現しているが、決して「麻酔」と表現していない。

現在までの知見によれば、華佗以後約一五〇〇年間、中国では全身麻酔が行われた実証がないのであるから、当然のことながら、「麻酔」という語が生れてくる必然性はきわめて小さいと見做しても差支えあるまい。

華佗伝以外の「後漢書」に「麻酔」の語が披見されないことは、「後漢書語彙集成」[7]によって窺い知ることが出来る。膨大な中国の書籍、中でも医書のすべてを渉猟通覧したわけではないので断定的なことは言えないが、その後の中国の史書「元史」[8]「金史」[9]さらには唐時代の詩[10]や宋代の文集[11]にも「麻酔」の語は全く披見されない。

諸橋徹次の「大漢和辞典」[12]には一七〇にも及ぶ「麻」を冠する熟語を掲げているが、「麻酔」については簡単な説明文

のみで何ら中国の出典を明示していないことも上述の事情を物語るものであろう。

元禄二年（一六八九）中国から琉球の首里へ麻酔の術を伝えた高嶺徳明の資料「魏姓系図」[13]にも、兎唇に対する手術を行ったことは記されているものの、「麻酔」については言及されておらず、したがって「麻酔」の二字の記載はない。

これより約九〇年前の一六〇三年、日本イエズス会に所属するポルトガルの宣教師たちが、長崎で出版した「日葡辞典」[14]には、当時使用されていた約三万六千の日本語が収録されているが、「麻酔」は見当らず、関連する語として、「Xibire, Xibiruru（シビレ、シビルル）」の語が見い出されるに過ぎない。

さらに「古事記」「日本書紀」から幕末に至る約一〇〇〇年の日本の史書、文芸書にも「麻酔」の語が全く見い出されないことも注目される。[5・6]

## 三　華岡青洲、本間棗軒と「麻酔」

華岡青洲が初めて通仙散を用いて全身麻酔下で乳癌の手術に成力したのは、[17]著者の研究によって通説より一年前の文化元年（一八〇四）十月十三日であったことが判明した。この第一例の藍屋利兵衛の母「かん」の手術については、青洲自身「乳巌治験録」[18]という詳細な記録を遺している。

その中で麻酔の状態を青洲は次のように記している。

「冬十月十有三日、朝我麻沸散を服す。少頃正気恍抗乎人事を識らず。終身麻痺して痒痛を覚えず。」

ここでも青洲は「麻酔」の語を用いていない。

当時日本において麻酔の研究に最も意を用いていたのは青洲であった。もし意識の消失を意味する「麻酔」の語が存在

し、医家の間に普及していたならば、青洲は麻沸散（麻沸湯）、一名通仙散を用いて作り出した状態を少くとも「麻酔」と称呼したであろうと考えるのは、あながち無理なことではあるまい。

麻沸湯を用いての手術で、師青洲にも劣らぬ業績をあげたのは本間棗軒（一八〇四―一八七二）と鎌田玄台（一七九四―一八五四）であった。彼らの著述すべてを検索したわけではないが、麻沸湯による全身麻酔の状態は「酔」や「瞑眩」（めいげん）などと表現され、「麻酔」の語は用いられていない。

しかし本間棗軒が文久四年（一八六二）に著わした「内科秘録」[19]巻五の「麻痺」の項には、以下に引用するように「麻酔」の語が披見される。

麻痺病ノ類極メテ多シ。皆諸経ノ閉塞ナリ。烏頭（うず）・附子（ぶし）・番木鼈（ばんぼくべつ）風茄兒（ふうかじ＝まんだらげ）・莨菪（ろうとう）・鴉片（あへん）・莽草（もうそう）・礜石（よせき＝ひ素を含む石）等ノ毒ニ中ル時ハ、必ラス麻痺ヲ発ス。又麻葉モ麻酔セシムルノ毒アリテ、伯楽ノ馬ヲ鬻（ひさ）クニ其性躁（さわが）シクシテ賣カヌル時ハ、竊（ひそか）ニ麻葉ニ握許（ばかり）喰シメ麻酔セシメ柔順ナル事ヲ偽シ賣ル事有リ（句読点、（　）内の読み方、註は著者）。

これによって「麻酔」の語史は、少くとも文久二年（一八六二）まで溯ることが出来る。

「麻酔」が中国で造られた語でないらしいことは、De Guignes の「漢洋字典」[20]の「麻」の部に「麻酔」の語が見られず、さらに Lobscheid の「英華字典」[21]に以下に示すように、「Anodyne」など麻酔の意味する英語の訳に唯一回も「麻酔」の語を採用していないことによっても、容易に理解されるであろう。

Anodyne　　減痛薬，止痛薬

Anasthesis n.　　迷蒙忘痛法

(Anaesthetics の誤りか)　　致睡的
Narcotic, Narcotical　　致睡薬, 睡薬
Narcotics medicine　　致睡之毒, 軽毒
Narcotic poison

すなわち、いわゆる「麻酔」を意味する語として、「減痛」、「止痛」、「迷蒙忘痛」、「致睡」などの語を充てて訳しており、全く「麻酔」という語を用いていない。もし中国で「麻酔」の語が当時すでに誕生していたならば、少くとも上記の訳語の一つに「麻酔」が用いられてもよいと考えられる。

このことから逆に中国では、当時「麻酔」が少くとも未だ一般には用いられていなかった言葉であると考えられる。

## 四　明治期前後の書籍に現われた「麻酔」

明治二十二年（一八八九）に出版された芳賀栄次郎[22]の「外科通論」には、「麻酔法」の項がある。この期に広く用いられた田代義徳訳の「智[23]兒曼斯氏外科総論」には、「麻酔法」「局所麻酔」の語が見え、明治三十二年に上梓された寺田織尾の編纂になる「無痛手術[24]」には、「吸入麻酔」の語が見え、これに対する局所麻酔を「局処麻痺法」「浸潤麻痺」と記している。すなわち、意識の消失を伴う全身麻酔に対して、「麻酔」、体の一部の麻酔を「麻痺」と区別している。

いずれにせよ、少くとも明治三十年代には、医学界のみならず、一般社会の間にも「麻酔」の語が普及していたのである。

明治六年（一八七三）刊の「独和辞典[25]」には、「Anaesthesie」はなく、「Narkotisch」が見られ、これに「麻痺スル、睡ク

ナル」と訳を与えている。明治十年（一八七七）に上梓された、わが国最初の和独辞典「和独対訳字林」[26]には、「Ma-sui マスイ、麻酔—シタル、schmerzstillend, narkotische,—スル narkotisch od betäubt sein」と記述されている。しかし同じ頃出版された、小田條次郎他編の「孛和袖珍字書」[27]、司馬凌海他編の「和訳独逸辞典」[28]には、「Anaesthesie」、「Narkose」「麻酔」などの語は見当らない。

「Narkotisch」に対しても「独和辞典」[25]では、「麻痺スル、睡クナル」の訳を与え、「和独対訳字林」には「麻酔シタル」と「独和辞典」とは異った訳語を与えているところからすれば、「麻酔」の語が日本では未だ十分に造語されて普及された語ではないことを容易に推測させるものである。

## 五　幕末の辞典に現われた「麻酔」

わが国でローマ字の普及に尽力した Hepburn は慶応三年（一八六七）に和英辞書の「和英語林集成」[29]を発行したが、「麻酔」について次の様な記載をしている。

Maszi マスイ、麻酔、Anodyne, narcotic, anasthetic (anaesthetic または anesthetic の誤りか、以下同じ)—szru, to be narcotized, or in a state of anasthesia

Maszi-zai マスイザイ、麻酔剤 n. narcotic medicine

ここでは「麻酔」「麻酔剤」と明確に記されている。

さらに溯って徳川幕府の洋書調所に勤務していた堀達之助が文久二年（一八六二）に刊行した本邦初の英和辞書「英和対訳袖珍辞書」[30]には、Anaesthesia, Anesthesia の語はなく、したがって、これに対する訳語をもたないが、「Narcotic(s)」

を「麻睡剤」、「narcotic (adj)」を「麻痺スル、睡ヲ催ス」と訳している。

また村上英俊が元治元年（一八六四）に著わした仏和辞典「仏語明要」[31]には「Anaesthesie」はなく「narcotique」に「鎮痛ノ」「narcotisme」に「睡クナル事」の訳を与えているが、Léon Pagès の「日仏辞典」[32]には「麻酔」の項は見られない。

以上によって幕末には「麻酔」は、「麻酔」とも「麻睡」とも書かれたことが明らかとなった。「酔」と「睡」は発音が似ている上に、意義も共通したものがあるので、混同して用いられたものであろう。

## 六　杉田成卿の「済生備考」に見られる「麻酔」

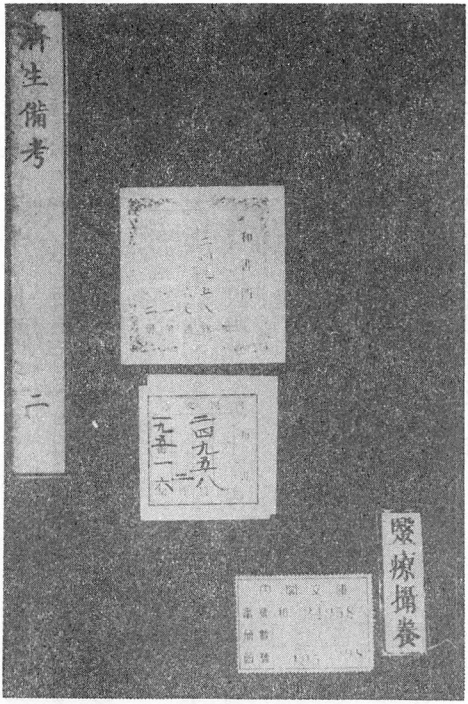


写真 1　「済生備考」表紙

以上によって「麻酔」の語は、中国で誕生したものではなくして、日本で造られたものと考えられ、その時期も文久二年（一八六二）より少し前であることが推察された。

日本で造語されたものとすれば、前述したように古来日本には「麻酔」なる語は存在しなかったのであるから、この語は外国語に対する訳語として造られたものであることが容易に想像される。

一般に、西欧の麻酔の歴史は一八四六年（弘化三）十月十六日の Morton のエーテル麻酔の公開実験に始まる。これがヨーロッパ大陸に伝えら

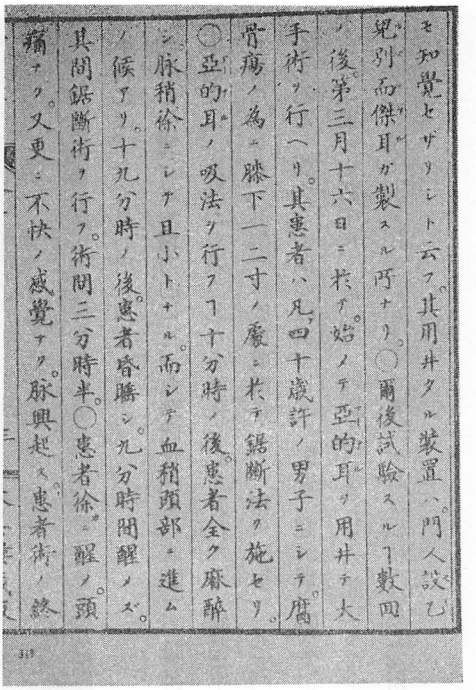

写真 2　「麻酔」が初出する頁
右から6行目最後に見える。

れ、麻酔に関する書冊が完成するになお一―二年を要したのであったから、麻酔に言及しているオランダやドイツの医書が完成し、日本に、舶載されたのは、一八四八年（嘉永元年）以降と考えて差し支えなかろう。

富士川游[33]によれば、嘉永元年（一八四八）から文久元年（一八六二）の間に翻訳された外科書として、嘉永七年（一八五四）の大槻俊斎の「銃創瑣言」と、内科の書冊としては杉田成卿の「済生備考」の二冊より知られていない。

杉田成卿（一八一七―一八五九）は蘭学を坪井信道に学んで、二十四歳で幕府の司天台訳員に任ぜられ、さらに蕃書調所教授となった。

彼の「済生備考」[34]（写真1）は、成卿が嘉永三年（一八五〇）に翻訳出版した上下二巻の医書で、巻一には「牛痘略説」と「聴胸器用法器説」が下巻に「亜的耳（アーテル吸法）試説」が収められている。

ライプチッヒ大学の Schledinger のエーテル麻酔に関する原著を、オランダ（ハーグ）の Sarluis が一八四七年に蘭訳したものを日本語に重訳したもので、原序、総括、硫酸亜的耳吸入ノ装置及吸法、人獣亜的耳吸スル効験、装置一図（写真2）からなっている。

この訳書の中で成卿は「麻酔」の語を用いており、それが最初に披見されるのは、第三枚の Sarluis の原序の中で、写真2に示すように「前略……亜的耳ノ吸法ヲ行フ事十分時ノ後。患者全ク麻酔シ脈稍徐ニシテ且小トナル。而シテ血稍頭

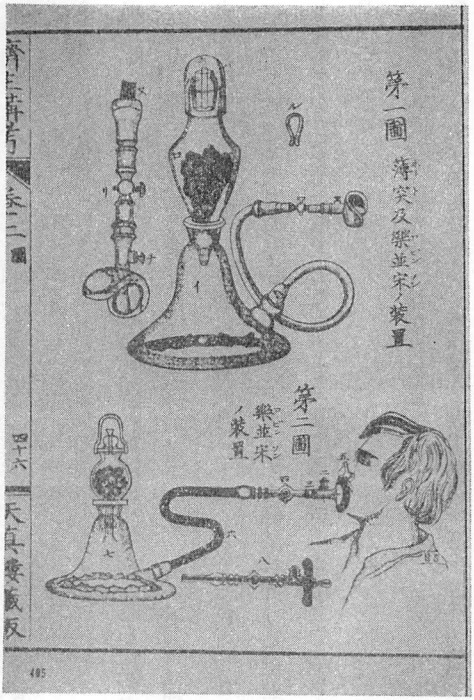


写真 3　巻末に見える吸入器の図

部ニ進ムノ候アリ。十九分時ノ後。患者昏睡シ。九分時間醒メズ。……後略」

以後しばしば「麻酔」の語は繰り返し使用されているが、この他に同義の語として「酔眠ノ態」「昏睡」「昏酔」などの語句が見い出される。ここでも「睡」と「酔」は混用されている。

## 七　おわりに

「麻酔」の語は、日本の文献として、は杉田成卿が嘉永三年（一八五〇）に出版した「亜的耳吸入法試説」の中に始めて披見され、それ以前の日本の史料には、全く見い出されない。

麻酔の研究を最も精力的に行った華岡青洲も「麻酔」の語を用いていない。

中国では、麻酔が普及されたと考えられる時代でも、諸種の文献に「麻酔」の語を見い出し得ない。

このことから「麻酔」は成田成卿によって嘉永三年（一八五〇）に造語されたものであろう。

もちろん、膨大な中国の医書や日本の医書、翻訳書や関連の史料全部を渉猟精査したわけではない。したがって将来嘉永三年以前の史料中に、「麻酔」の語が発見される可能性も否定出来なく、本稿の結論も訂正される場合もありえよう。

しかし、もし見い出されたとしても、それは極めて特殊な使用例であろうが、一応本稿を未定稿としておく。

## 文　献


(1) 松木明知、麻酔科学史研究最近の知見（六）―〝麻酔学〟の名称改正について―　麻酔　二八巻、一〇九九頁、昭和五四年
(2) 松木明知、麻酔科学史研究最近の知見（一二）―再び麻酔科の名称改正について、佐藤暢教授に対する反論―　麻酔（投稿中）
(3) 小川鼎三　医学用語の起り　東京書籍株式会社　昭和五八年　一四〇頁
(4) 北京中医学院主編（夏三郎訳）、中国医学史講義、燎原書店　一九七七年
(5) 本田済編訳、漢書・後漢書・三国史列伝選　平凡社　中国の古典シリーズ（三）　一九八〇年
(6) 江上波夫、華佗と幻人　石田博士頌寿記会　東洋史論叢　昭和四〇年所収
(7) 京都大学人文科学研究所編　後漢書語彙集成（下巻）　京都大学人文科学研究所　二〇〇九頁　昭和三七年
(8) 京都大学文学部編　元史語彙集成（中巻）　京都大学文学部　昭和三七年　一六六〇頁
(9) 京都大学人文科学研究所編、全史語彙集成（下巻）京都大学人文科学研究所　昭和三七年　九七七頁
(10) 吉川幸次郎、小川環樹編、中国詩人選集総索引、岩波書店　昭和三四年
(11) 佐伯　富編、宋代文集索引　東洋史研究会　昭和四五年　七四〇頁
(12) 諸橋徹次、大漢和辞典　十二巻　九四一頁　昭年五一年
(13) 魏姓家譜、高嶺康二氏蔵
(14) 土井忠生、森田武、長南実訳、日葡辞書　岩波書店　一九八〇年
(15) 岩波書店編集部、日本古典文学大系（一―六六巻）　岩波書店　昭和三八年
(16) 岩波書店編集部、日本古典文学大系（六一―一〇〇巻）　岩波書店　昭和四三年
(17) 松木明知、華岡青洲による最初の全身麻酔の期日　麻酔　二一巻　三〇〇頁　昭和四七年
(18) 華岡青洲、乳巌治験録（文化元年）　自筆稿本　天理図書館蔵
(19) 本間棗軒、内科秘録（文久二年）　近世漢法医学集成（二一）　所収　名著出版社　昭和五四年
(20) De Guignes 漢洋辞典（Dictionarium Sino-Latinum）香港　一八五三年
(21) Lobscheid, W.（井上哲次郎増訂）、増訂英華辞典（English-Chinese Dictionary）　藤本氏蔵版　明治十六年
(22) 芳賀栄次郎　外科通論（上）　島村利助刊　明治二二年
(23) 田代義徳訳、智兒慢斯氏外科総論　改訂第四版　南江堂

(24) 寺田織尾編、無痛手術　明治三二年
(25) 松田為常、瀬之口隆敬、村松経春編、独和辞典　明治六年
(26) 斎田訥於、那波大吉、国司平六編　和独対訳字林　明治十年　東京
(27) 小田條次郎、藤井三郎、桜井勇作編、孛和袖珍字書　学半社　明治五年
(28) 司馬凌海、明石　文、明石朝幹、河村文昌、沢田勝伯編、和訳独逸辞典　春風社　明治五年
(29) Hēpburn, J.C. 和英語林集成（Japanese Dictionary）　一八六七年　横浜
(30) 堀達之助、英和対訳袖珍辞書　徳川幕府洋書調所　文久二年
(31) 村上英俊、仏語明要　達理堂　元治元年
(32) Pagès, L. 日仏辞典　一八六二―一八六八　Paris
(33) 富士川游　日本医学史　日新書院　昭和十六年
(34) 杉田成卿　済生備考　嘉永三年

# Etymological Study of "Masui"

by

Akitomo Matsuki

The Japanese word "Masui" is considered to have originated from Chinese.

Investigating numerous numbers of Chinese literatures since the third century, I could not find the word "Masui". In addition, I could find no other Chinese word than "麻酔" in a English-Chinese dictionary published in 1886. This fact implies that Chinese did not use "麻酔" to express a state of anesthesia.

We did not find the word "Masui" in any of the literatures including medical science published before the Bunka-Bunsei period.

In 1850, Seikei Sugita translated and published the medical book entitled "Sai-sei-bi-ko" into Japanese in which he used "Masui" to express the physical state produced by ether in halation. This is the first use of the Japanese Word "Masui" in Japan.